

カルタを初め、「地下の国のアリス」のオリジナル原稿、ビートルズの原稿など、魅力的な資料が展示されています。視覚資料にとどまらず、たくさんの録音資料も公開されています。私はナイチンゲールの声を試聴してきました。ブックショップには、英国図書館に関する図書や英国図書館グッズも販売されています。また、英国図書館の資料をより有効に利用するために、そしてより興味を深めるための市民講座も開かれています。

なかでももっとも興味深かったのが、図書館で行われたダンス・ショーです。'Dance Umbrella' というダンス・グループが図書館という建物を舞台に幻想的なショーを繰り広げました。図書館の廊下、階段、オープン・スペースに、シンプルな衣装をつけたダンサーが、本や新聞を使って踊るのです。ダンスと音楽と白い壁に映し出される画像が不思議な空間を生み

出していました。このショーは、5日間にわたり、図書館閉館後に行われましたが、チケットはあっという間に売り切れたそうです。私をこのショーに招待してくださった図書館員の方の言葉が印象的でした。「わたしはこんなにすばらしい図書館で働くことができて幸せです」。ショーの後、楽しそうに帰って行く人々を見ながら、この人達もきっとだんだん英国図書館の支持者になっていくに違いないと思いました。

この新館の立ち上げには、さまざまな計算ミス、多くの反対、それに伴う工事等の遅滞があったと聞きました。現状から、とりあえず今何ができるかを考えることも大切です。けれども、はじめに明確なビジョンを掲げ、その実現に向かって邁進する英国図書館の姿を、私はとても眩しく感じました。

今回は、イギリスの大学図書館について報告する予定です。 (どんかい さおり)

経済学部図書室紹介

—シリーズ「京都大学図書室巡り」—

経済学部図書室に所蔵する珍しい本、そうです！お宝を紹介しましょう。

その筆頭は、やはり「上野文庫」^{注)}でしょう。

「上野文庫」は、朝日新聞社主であった上野精一氏(1882-1970)が収集された書籍と新聞関係資料から成り立っています。幕末・明治初期の新聞が、経済学部図書室4層の貴重書を納めた書庫の中にあります(図1)。帙に包まれた新聞を取り出してみました。『官板バタヒヤ新聞』・『京都新報』・『官許琵琶湖新聞』などなど。どれも和綴です(図2)。私たちの新聞に対してもっているイメージとは大部違います。

『朝日新聞』の第1号もあります(図3)。“明治12年1月25日(土)”という発行日付です。こちらは、現代の新聞と同じような体裁ですが、大きさは今のより小さいです。

アダム・スミスの『国富論』初版(1776年)2版(1778年)も貴重です(図4)。

4層の貴重書庫の中には、河上文庫として経済学部教授であった河上肇(1879-1946)の旧蔵書もあります。河上の手による書き込みのある図書・自筆ノート・原稿、ここにも経済学部

に長い時間が流れているを感じさせます。1層の一般図書書庫には、地方史誌関係の本が多数あります。日本中を北から南まで、いろいろな地域の史誌類が収集されています。古書店で相当に高価な値段の付いているような本が目白押しです。挿絵や写真図版を眺めていると、不思議な風景、懐かしい情景を見ることが出来ます。

無論、経済学部図書室には最新の経済学関連の書物が多数収集されています。今回は視点を変えた経済学部図書室案内です。書庫の中には残念ながら経済学部教官・大学院生以外は入れません。目録で検索の上、利用したい本をご覧ください。

では、一度経済学部図書室にいらしてみてください。

(文：経済学部整理掛 菅 修一

写真： 同 中尾佳樹)

注)「上野文庫」に関して『静脩』においては既に次の文献で紹介されています。

- ・「資料紹介——経済学部 上野文庫について」『静脩』vol.2(4)(1965)p.25

- ・「図書室めぐり——経済学部図書室：特殊文庫を中心として」同上 vol.15(3)(1978)pp.4-5
- ・高橋俊哉「上野文庫 1 冊のインキュナビュラについて」同上 vol.16(2)(1979)pp.5-6
- ・平井俊彦「上野文庫」同上 vol.25(2)(1988)pp.3-5



図1 4層の貴重書庫

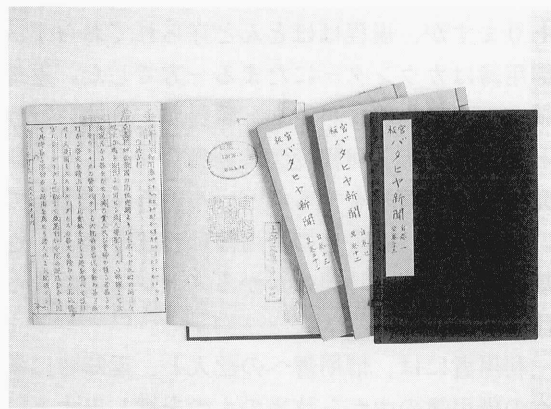


図2 官版バタビヤ新聞



図3 朝日新聞 第1号



図4 アダム・スミス『国富論』初版・2版